

# 論稿

## Oliver Twistに描かれた 1830年代ロンドンの犯罪

那須大学助教授 駒場利男

### 目次

- |                               |                              |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 はじめに                        | (2) 裏社会の女性—Nancy             |
| 2 <i>Oliver Twist</i> について    | (3) 絞首刑の予感                   |
| (1) <i>Oliver Twist</i> の誕生   | 4 <i>Oliver Twist</i> 、作品の背景 |
| (2) <i>Oliver Twist</i> のあらすじ | (1) Dickensの生い立ち             |
| (3) <i>Oliver Twist</i> の評価   | (2) 新救貧法                     |
| 3 <i>Oliver Twist</i> に描かれた犯罪 | (3) 都市化の問題                   |
| (1) 少年たちの犯罪                   | 5 おわりに                       |

## 1 はじめに

Charles Dickensは19世紀英国のVictoria朝文学の最高峰に位置する作家である。自伝的小説といわれる *David Copperfield* や、フランス革命時代のパリとロンドンを舞台にした歴史小説 *A Tale of Two Cities* など多数の作品を残している。本稿で取り上げる *Oliver Twist* は彼の初期の作品であり、産業革命後の社会変革期における都市の問題、特に犯罪や貧困などの社会問題に焦点を当てた社会派小説である。

本稿では、まず *Oliver Twist* 誕生の経緯、物語のあらすじ、作品の評価などを確認した上で、この作品に描かれた19世紀前半のロンドンにおける犯罪について考察する。Oliverのような少年による犯罪、Nancyに代表される社会の底辺に落ちた女性 (fallen women)、また当時裏社会で日常的に語られ、一種の見せ物でもあった死刑について見ていく。最後に、この作品の背景となる、作者の生い立ち、救貧法改正や都市化の問題を取り上げる。

## 2 *Oliver Twist* について

### (1) *Oliver Twist*の誕生

Charles Dickens の2番目の小説である *Oliver Twist* は1837年から1839年にかけて、月刊誌 *Bentley's Miscellany* に24回に渡って連載され、後に3巻本として発行された。Dickensは連載開始の時点で25歳になったばかりの青年作家であったが、その前年に発行された *Sketches by Boz* の成功により既に名声を博していたし、1836年の結婚、翌年1月の長男誕生など、家庭的にも充実していた。*Oliver Twist* は、副題 *The Parish Boy's Progress* が示すように、救貧院 (「あらすじ」では「養育院」となっているが本稿では「救貧院」とする) 育ちの孤児Oliverが悪のはびこる裏社会に身を置くことを余儀なくされながら

も、純真な気持ちを失わず、やがて立派な人間になるまでの物語である。1841年の第3版への序文の中で、DickensはOliver少年を通して、あらゆる逆境を切り抜けて最終的には善が勝利することを示したかった<sup>1)</sup>、としているが、その善と対立する悪の部分、即ち、社会の底辺のひどい貧困や犯罪者たちの悲惨な現実を強調することで、当時の社会問題に焦点を当てている。

当時、産業革命後の英国では、急激な工業化と都市化により広範な社会変革が起こり、その結果さまざまな社会問題が生じていた。多くの作家がこうした社会問題を積極的に文学の中で取り扱っていた<sup>2)</sup>。特に、1830年代に多く出版された犯罪者を扱った小説はNewgate novelsと呼ばれ、1834年に出たAinsworthのRookwoodはロンドン市民を熱狂させるほどの大ヒットとなった<sup>3)</sup>。この頃、DickensはAinsworthと知り合っているが、まだ無名の貧しい文学青年に過ぎなかった。短編の投稿などをしてきたDickensはAinsworthを師と仰ぎ、作家の道へと入っていくことになる。以後、親友、ライバルとして互いに刺激しあいながら2人の親交は十数年続いている<sup>4)</sup>。こうした時代背景の中でOliver Twistは生まれた。DickensはNewgate物の作家として扱われることになるが、Ainsworthに倣って本を書いたと非難されるのは不当だとして、彼らと一線を画す努力をしていた<sup>5)</sup>ようである。

## (2) Oliver Twistのあらすじ

次にOliver Twistのあらすじを「イギリス文学案内」<sup>6)</sup>より転載する。カタカナ表記の登場人物名はアルファベット表記に変更している。

Oliver Twistは両親を知らないかわいそうな孤児である。彼の母は道ばたで倒れていたところを養育院にかつぎこまれ、そこでOliverを生むと名前も告げずに死んでしまった。Oliverは他の孤児たちと一緒に、この養育院を管理する教区の小役人Bumbleに意地悪をされ、残酷な待遇を受ける。あるときクジで孤児の代表に選ばれたOliverが、院長の方へ椀とスプーンを持って進み出ると「お願いします。もう少しください」と粥をもう一杯哀願したので(第2章)、恐るべき子供として葬儀屋の小僧に出されたが、Oliverはそこを逃げ出してロンドンへ行く。

ロンドンではユダヤ人の悪党Faginを首領とする盗賊団の手に捕らえられ、Faginの相棒のBill Sikesやその情婦Nancyなど、ロンドンの貧民街に巣くう悪党の仲間引き込まれ、もっぱら悪事を仕込まれるが、Oliverはなかなか悪事にくみしない。そのうちに情け深い紳士Brownlow氏に救われて一時保護されるが、Monksという奇怪な男にそそのかされた盗賊団に再び誘拐され、また悪党の手先に使われるようになる。そしてBill Sikesに夜の荒稼ぎに連れ出され、一軒の家に忍び込んだ時、Oliverは負傷して捕らえられたが、その家に住むRoseという若い養女に親切にされる。ところがMonksという男は、Faginを買収し、Oliverを永久に盗賊仲間から浮かび上がらせないようにと頼み込む。かねてからOliverに同情していたBill Sikesの情婦Nancyは、この陰謀をRoseとBrownlow氏に告げ、悪党たちの隠れ場所を教えたため、裏切り者としてBill Sikesに無惨に殺される。

しかしすでに警察の手がまわり、Faginは逮捕されて絞首刑、Bill Sikesは逃げまわったのち、泥棒道具の縄で誤って自分の首をつって死ぬ。こうして悪党はすべて滅び、やがてOliverの素性も判明した。Monksという男は実はOliverの異母兄で、父の遺産を独占しようとたくらんで、Oliverを出生のはっきり

しない悪党にしておこうと企てたのだった。またRoseはOliverのおばであることもわかり、Brownlow氏はそうした事情を最もよく知っているOliverの父の親友なのであった。OliverはBrownlow氏の養子となって幸福な生活に入る。

### (3) *Oliver Twist*の評価

山本は「主人公のオリヴァー自身は生気に乏しく、その単純さ、善良さは説得力を欠いていると言わざるをえない」<sup>7)</sup>としている。天涯孤独の身の上で、救貧院で虐待を受けながら育ち、その後ロンドンのスラム街にはびこる盗賊団の仲間に入れられる。このような状況の中で純真な気持ちを保ち続けることは奇跡的なことであろう。

小池は「社会の悪や制度の矛盾が徹底的に攻撃されているが、それは例えば弱い者いじめの小役人バンプルとか、ずる賢いフェイギンのように、あくまで個人によって代表され、そうした邪悪な個人がこれも善を代表する個人（例えばブラウンロー氏）によって罰せられることによって、一切の問題は解消するのである」<sup>8)</sup>と述べている。善と悪の対立が個人対個人の単純な形であり、最後に全てが明らかになり、悪が減び善が栄える（幸福になる）という勧善懲悪のmelodramaになっている。このmelodramaということばはDickensの作品の批判にしばしば使われてきた。芝居がかった悪人、善良すぎるヒロイン、ありそうもないプロット、これらは典型的なmelodramaということである<sup>9)</sup>。Dickens自身、このmelodramaが文学より一段下に見られることは意識していたし、自分の作品がそのmelodramaに類似していることも認識しており、8回目の連載で17章の冒頭にmelodramaについて言及している<sup>10)</sup>。

Homeは、この作品がShakespeareの域にまで達しなかったのはプロットに工夫が不足しているように見えることや、偶然性に頼る部分が多いことなどを指摘し、偶然の例として、OliverがFaginのところから初めて外出したときに仲間の2人の少年がスリを働いた相手がたまたまBrownlow氏であったこと（Brownlow氏はOliverの父親の昔馴染みであり、Oliverのおばさんとかつて恋仲であった。またBrownlow氏はOliverの母親の肖像画を持っていたが、それがOliverにそっくりであった）や、OliverがSikesに連れられて忍び込んだ先がOliverのもう一人のおばさんRose Maylieが住んでいる家であったこと、などを挙げている。また同氏は、*Oliver Twist*をより正しく理解するには、この作品を"a thrilling triumph of improvisation"として見る必要があるとし、Dickensが事前に、この物語のプロットをよく練っていたかどうかや、連載開始の時点でそもそも小説を書くつもりであったかどうかについて、批評家の間で意見が分かれるところであると述べている<sup>11)</sup>。後戻りすることができない連載形式（2年3ヶ月に渡り24回）であり、即興的要素が多分にあったと思われる。Dickensの主な作品は連載形式で書かれている。通常1回に2ないし3章分と挿し絵が入る。1回分の値段は1シリングであったという<sup>12)</sup>。後年1995年にStephen Kingが*The Green Mile*を書く際にこの手法を採り入れ6分冊の連載にしているが、その序文の中でDickensに言及している。

作品が書かれた当初からこのような批評、批判がされてきたが、当時の多くのNewgate novelsやmelodramaが忘れ去られていく中で、世紀を越えて愛読され続けてきている。100年を越す時の流れや社会の変革にもかかわらず、読者の心を打つ普遍的なものが含まれているからであろう。

この作品が発表されたとき、Ainsworthの*Jack Sheppard*と結びつけて、犯罪を美化しているという批判

もあったが、*Oliver Twist*は幅広く賞賛を持って受け入れられ、当時の社会のドキュメンタリーとしても読まれていた<sup>13)</sup>。当時、本の値段は高く誰でも入手できるものではなかった。連載形式で1回分が1シリングと手頃な値段になったこともあり、一般大衆に広く読まれたと思われる。若きVictoria女王が*Oliver Twist*を読んで非常におもしろいと思ったが、首相のMelbourne卿がそれに対して眉をひそめたという逸話<sup>14)</sup>も残っている。一般大衆のみならず、上流階級の間でも話題になっていたことを示している。当時の読者は、自分たちとは無縁とも思える、社会の底辺にうごめく悪人たちの悲惨な現実の描写を、単なる物語としてだけでなく、悪のはびこる裏社会の問題を鋭く抉るドキュメンタリーとして受け取ったのであろう。

西條<sup>15)</sup>が、Dickensの初期の作品について「作品構成は稚拙であるが、他方、個々の場面における人間洞察、制度諷刺、場面構成には非常にすぐれたものがある」としている通り、*Oliver Twist*は特に悪を代表する人物の人間洞察に優れている。SikesやFaginの、死を目前にした追いつめられた人間の内面描写や、Nancyの、善を代表する人間からの救いの手に乗ることができず、死の予感を覚えながらも元の世界に戻り、結局は非業の死を迎えざるを得なくなる心の葛藤など、において単なる勧善懲悪型のMelodramaを越える普遍性が見られる。

### 3 *Oliver Twist*に描かれた犯罪

#### (1) 少年たちの犯罪

Oliver少年は、救貧院を逃げ出してから7日目に、ロンドン郊外のバーネットという町にたどり着く。そこで自分と同年齢くらいの変なかつこうをした少年に声を掛けられ、食べ物をごちそうになる。この少年がJack Dawkins、通称The artful Dodgerであった。行く当てもないOliverが、親切にしてくれたJackに誘われてついて行ったところが路地裏の家であった。Oliverは逃げた方が良さそうだったと思ったが遅かった。そこは、ユダヤ人のFaginを親玉とする盗賊団の巣窟であり、何人もの少年たちがいた。Faginはこの少年たちを使って悪事を働いていたのである。Oliverは否応なくこの仲間に入れられてしまう。

Faginの部屋に寝泊まりするようになって10日程たった頃、外出の許可があり、Oliverはthe Dodger、Charley Batesとともに出かけることになった。これは「仕事」のための外出でありthe DodgerとCharley Batesは、本屋で立ち読みをしていたBrownlow氏のポケットからハンカチをすり盗り逃げてしまう。逃げ遅れたOliverは捕まってしまう。これがOliverが悪事に立ち会う最初となった。

Emsley<sup>16)</sup>によれば、産業革命による急激な社会変革の結果、19世紀前半に、犯罪、特に窃盗が急増したという。窃盗の多くは、干してある洗濯物の衣類や、主人の家の家具や食器等を盗むなどの軽微なものであった。少年犯罪も19世紀初めから問題視されるようになり、Faginのように、街の浮浪少年を集めてすりに仕立て上げる親玉(kidsmen)の話は19世紀の第2四半世紀にかなり流布していたようである。

捕らえられたOliver少年は、簡易裁判を経て、結局は疑いが晴れ釈放されるのだが、その裁判の中で危うく3ヶ月の重労働の刑に処せられそうになる。この「3ヶ月の重労働」というのは、1824年のVagrancy Actの下で「悪事を働く意図を持って町中をふらついている」罪で科すことのできる最高刑であった<sup>17)</sup>。この裁判の判事(The police Magistrate) Mr Fangは、教区の小役人Mr Bumbleとともに、弱い

者いじめの意地悪な人間の代表として登場している。

The artful DodgerやCharley Batesなどの少年たちが、どのような経緯で悪の道に入ったのかは書かれていないが、Oliverの場合と似たような経過を辿ったと思われる。1834年に改正（悪）された新救貧法（the Poor Law Amendment Act）は、救貧院での非人間的な扱いを正当化するものであり、当時22歳のDickensはこの改正案の基本的な考え方に猛烈に反対していたという<sup>18)</sup>。

これにより、救貧院を出ざるを得なくなった、身寄りのない多くの少年が都会のスラム街で浮浪児になり、すりや窃盗などの悪の道に入るのは時間の問題である。第1巻19章で、結局はOliverが使われるが、強盗に入るのに子どもが必要となり、Sikesが"There are fifty boys snoozing about Common Garden every night, as you might pick and choose from"(160)と言う場面がある。毎晩、コヴェント・ガーデンに集まってくるホームレスの少年がたくさんいたことを示している。こうした少年たちが、やがてはより重い罪を犯すようになり、絞首台の露と消える者もいたであろう。

救貧院にいる時、Oliverはクジで当たってしまい、院長に、もっとお粥をくださいと言いに行く有名な場面がある。"Please, sir, I want some more."(15)と言うOliverのことばに院長は顔が青ざめてしまう。このことを聞いた、白いチョッキの紳士が"That boy will be hung,"(15)と言う。そのような不埒な罪（もっと欲しいと言うこと）を犯すような子どもは、将来とんでもない悪人になって死刑になるだろう、ということである。Dickensは、第1巻7章で、同じ白チョッキの紳士に次のように言わせている。

I knew it! I felt a strange presentiment from the very first, that that audacious young savage would come to be hung! (52)

わしは最初の最初から妙な予感がしとったんじゃ。あの、むこうみずの小僧はどうせ絞首台行きだとな。(上90)

後に、Sikesの強盗の一味に加えられ、ある屋敷に忍び込んだOliverは、その家の召使いに撃たれ重傷を負って捕らえられてしまう。その時、いかげ屋がOliverを介抱する場面があるが、その理由が"lest he should die before he could be hung"(233)（絞首刑になる前に死んでしまっただけではいけない）というものであった。このように、少年の犯罪は、絞首刑への一里塚のような、この時代の気分があったのであろう。

Dickensは、おとなの犯罪の場合は難しいが、少年犯罪者は矯正可能であり、少年を監獄送りにするのは常習犯の影響を受けるだけだと考えていた<sup>19)</sup>ようである。

## (2) 裏社会の女性—Nancy

Dickensは第3版への序文の中で、悪の世界の登場人物に触れ、"the girl is a prostitute."<sup>20)</sup>と書いており、Nancyが売春婦であることがわかる。しかし、作品の中ではprostitute（売春婦）やbrothel（売春宿）などのことばは使われてはいない。Horneが指摘している<sup>21)</sup>ように、売春婦としてのNancyの活動は描かれてなく、読者の想像に任されている。第3巻3章には、Nancyのこれまでの生活を振り返って、次のように書かれている。

The girl's life had been squandered in the streets, and the most noisome of the stews and dens of London.

(332)

これまでの彼女の生活はロンドンの街頭で客を引いたり、汚らわしい売春宿や盗賊の住み家にくすぶったりして送ってきた。(下153)

この部分で、彼女が街娼であることが、かろうじて分かる。この中ではbrothelsではなくstewsということばが用いられている。第3巻8章で、Oliverに同情を寄せていたNancyは、彼を救うためBrownlow氏やRoseにFaginらの陰謀について話し、一味の隠れ家を教える。その協力に対するお礼にNancyを悪の世界から救い出してやろうと、Brownlow氏がいろいろ彼女に話しかける場面がある。その中に彼女の過去に触れる下のような部分があるが、"priceless treasures lavished"に売春婦であることを感じ取ることができる。

the past has been a dreary waste with you, of youthful energies mis-spent, and such priceless treasures lavished as the Creator bestows but once, and never grants again, but for the future you may hope. (388)

あなたの過去は確かにすさんだものだったろう。元気な若さを悪の道に費やし、神様が一生に一度しかお与え下さらないような、大切な宝を無駄に使い果たしてしまったろう。しかし、未来には希望は持てるんだ。(上247)

NancyはOliverの半分にも満たない年頃からFaginのところで泥棒をするようになり、それ以来12年もの間この稼業をやっている<sup>22)</sup>。Oliverは救貧院で9歳の誕生日を迎えている。すると、Nancyは物心つくかつかない4、5歳頃にこの世界に身を置くようになっていた訳であり、この物語の時点では16、7歳の娘ということになる。

Oliverは、The artful DodgerにFaginの所に連れて来られたその翌日に、The Dodgerを訪ねてきたNancyに会い、彼女に対して好感を持っている。一度善の世界に戻ったOliverを再び悪の世界に連れ戻す(誘拐する)役割を果たすのがNancyである。再びFaginの所に連れ戻されたOliverが部屋から逃げ出そうとしてユダヤ人に痛い目に遭わされる。その時、Nancyは必死の思いでOliverをかばう。

このNancyに救いの手が差し延べられる。NancyはMonksの企みを伝えるためにRose Maylieを訪れる。初対面にもかかわらず親切にしてもらったNancyは、涙にむせびながら"if there was more like you, there would be fewer like me." (333)と言う。身の危険を省みずにその話を伝えにきてくれたNancyを、悪の世界から救いたいと思い、Roseがそのことを口にする時、Nancyは次のように答える。

Lady, dear, sweet, angel lady, you are the first that ever blessed me with such words as these, and if I had heard them years ago, they might have turned me from a life of sin and sorrow; but it is too late — it is too late.

(336)

お嬢さん、やさしい天使のようなお嬢さん、そんな有難いお言葉をかけて下さったのは、本当にお嬢さんがはじめてですわ。もしそのお言葉を何年も前に聞くことができれば、きっと私は罪と悲しみ

の生活から足を洗えたことでしょうに。でも、今となってはもう手遅れなの。もう手遅れなのよ。  
(下160)

生まれて初めて優しいことばをかけてもらい、Nancyは心の中で葛藤を覚えるが、Roseの差し延べる救いの手に触れることができない。さらに、数日後、船着き場の階段のところで、前述のBrownlow氏とのやりとりの中でも、再度救いの手が差し延べられる。ここでも、Nancyは、次のように言って、救いの機会を自ら閉ざしてしまう。

I am chained to my old life. I loathe and hate it now, but I cannot leave it. I must have gone too far to turn back. (388)

あたしは昔の生活に縛られているんです。今ではそんな生活は、いや気がさして嫌いですが、でも、やっぱり離れられないんです。深入りしすぎて、もう引き返せなくなってしまったんです。(下248)

一度、裏の社会の悪の世界に身を置いた女性が、善の世界に戻るということがいかに難しいものであるかを如実に物語っている<sup>23)</sup>。元の世界に戻ったNancyは、陰謀をバラしたことが露見し、Sikesに殴り殺されてしまう。

Nancyの泥棒や売春婦としての部分は暗示されるだけで、読者の想像に任されている。犯罪者らしい行為として描かれるのは、Oliverを再び悪の世界に連れ戻す（誘拐する）ことだけである。Dickensの小説には売春婦がよく登場する。彼は、女性を街に誘い出す一番の要因が厳しい経済状況であることを認識していたし、後年（1848年）には売春婦のための更生施設を作り、その運営に自ら携わったりしている<sup>24)</sup>。DickensはNancyのような裏社会に落ちた女性に同情的であり、Nancyを、裏社会にはいるが、犯罪者としてではなく、女性の天性に目覚めた悲劇のヒロインとして描いている。

### (3) 絞首刑の予感

Homeが指摘する<sup>25)</sup>ように、*Oliver Twist*には全編に渡り死刑の影が見え隠れする。また同氏は、教区の小役人Bumble氏から与えられたOliverの苗字Twistはperversity（邪悪、非行）のみならず"twisting as one swings on the rope"から絞首刑を連想させる、とも指摘している。作品の中で、絞首刑に言及または暗示している部分は30箇所以上もある。連載1回目の最後（第2章の終わりの部分）で、白チョッキの紳士（前出）に次のように語らせて、2回目以降への読者の興味を喚起するとともに、この物語のモチーフのひとつになっていることを示唆している。

I never was more convinced of anything in my life, than I am that that boy will come to be hung. (17)

わしは生涯を通じてこれ程の確信を持って言ったことはないが、あの小僧はきっと絞首台行きだぞ。  
(上34)

Oliverの絞首刑の可能性への言及は全部で6回あり、白チョッキの紳士、いかげ屋の他に、葬儀屋で一

緒に働いたNoah Claypoleにも、Oliverが絞首刑になる時はぜひ見に行きたいものだ（第1巻6章）と言わせている。Oliverがロンドンに逃げ出すことになる原因は、このNoahに死んだ母親のことを、今も生きていれば、監獄で重労働か、流刑か、絞首刑だ、と言われたことにある。腹を立てたOliverはNoahを殴り倒してしまう。

NancyやFaginとの話の中で何度も絞首刑に触れていたSikesは、絞首刑そのもののような最後を迎えている。SikesはNancyを殴り殺した後、恐怖に駆られ何度も彼女に棍棒を振り下ろす。悪人のSikesも、死んだNancyの目が自分を見ているように見え、さらに恐怖に襲われる。凶器の棍棒を炉に入れると、それに付着したNancyの毛髪が音を立てて燃える。ロンドンから逃亡したSikesが田舎道をさまよい歩いている時の恐怖におびえる様子をDickensは次のように描いている。

He went on doggedly; but as he left the town behind him, and plunged further and further into the solitude and darkness of the road, he felt a dread and awe creeping upon him which shook him to the core. . . . He could hear its garments rustling in the leaves, and every breath of wind came laden with that last low cry. (402)

彼はしゃにむに歩き続けたが、街を後にして誰一人通らぬ真っ暗な街道筋になると、恐怖で全身がぞっとしてきて、骨の髄までがたがたふるえた。 . . . 木の葉がざわめくとその女の姿の衣ずれの音を聞き、風がそよそよ吹く度に、あの女の低い断末魔の叫び声が聞こえた。(下273)

ロンドンのスラム街ジェイコブ島に舞い戻ったSikesは、結局は追いつめられ、屋根の煙突からロープで下に降りようとして、誤ってそのロープで首を吊って死んでしまう。屋根の上がまさに彼の土壇場であり、宙吊りのその姿は絞首刑そのものである。しかも、その様子を群集が怒号の中で見物していたのである。

最も多く絞首刑の話をしてきたのが、ユダヤ人の悪党Faginである。ある時は、Faginのことは口を割らずに刑死した手下どものことを思い出しての独白であり、またある時はOliverなどの子どもを捕まえて、絞首刑の恐ろしさをどぎつく語ったりしている。これまで自分の罪を着せて多くの仲間を死刑台に送ってきたFaginも、ついに悪事の首謀者であることが露見し、殺人煽動罪で死刑の宣告を受けることになる。彼は絞首刑の恐ろしさを思い、恐怖に身を震わせる。外では群集がFaginの死刑を知って歓声を上げる。その夜、独房の中で、死刑になっていった昔の仲間のことを思いだし、恐怖におののく。Dickensは、死刑の宣告を受け、死を目前にして恐怖に怯え、罪の意識に苛まれるFaginの心の内をリアルに描きだしている。

西條<sup>26)</sup>は、Sikesの死に至るまでを「犯人を憔悴させ死に追いやる数章は、センセーショナルな殺人小説の域を抜け出て、すぐれた文学となっている」とし、Faginの最期については「Sikesの場合に劣らず内景描写にすぐれ、作品の白眉となっている」と評している。この、死の恐怖におののき、罪の意識に責められる2人の悪人や、Nancyの揺れ動く心の内の描写など、優れた人間洞察がこの作品を単なる勧善懲悪型のメロドラマに終わらせず、読む者の心に響き続ける所以であろう。

2(1)で述べたように、産業革命後の社会の大変革の中、19世紀前半に窃盗などの犯罪が増加している。それに伴い、死刑の宣告も増えていったようである。この物語の中で、悪人の世界とはいえ、絞



首刑が日常的に語られているのは、そのような時代背景がある。Horne<sup>27)</sup>によれば、19世紀初めの30年間に処刑された者は、18世紀後半の50年間の刑死者数の2倍に及ぶという。また、1820年代に絞首刑になった671名のうち、3分の2は窃盗などのproperty crimeによるものであり、殺人を犯して死刑になった者は5分の1しかなかったという<sup>28)</sup>。さらに、1837年の死刑宣告が438件であり、1839年にはそれがわずかに56件に急減し、実際に執行された者も少なかったとしている。この2年間は*Oliver Twist*の連載期間と重なっている。死刑宣告数の減少は法改正などの結果ではあるが、この作品の影響も少なからずあったのではないだろうか。Oliverのような14歳以下の少年に対する、窃盗罪などによる死刑宣告（実際は執行されていないが）も、1800年代の初めには結構あったようである。

この頃、作家や知識人の間では、死刑廃止の議論が盛んであった。1800年代初めの30年間に急増した死刑を憂えてのことである。若きDickensも死刑に反対していた。1841年の第3版への序文の中でDickensは次のように書いている。

Johnson's question, whether any man will turn thief because Macheath is reprieved, seems to me beside the matter. I ask myself, whether any man will be deterred from turning thief because of his being sentenced to death.<sup>29)</sup>

死刑がないからといって誰でも泥棒になろうと思うわけではないし、死刑があるから泥棒になるのをやめるわけでもない。死刑の存在が必ずしも犯罪の抑止力になるものではない、という認識を持っていたことを示している。Emsley<sup>30)</sup>によれば、Dickensは死刑廃止論議に深くかかり、1840年の処刑見物に強く触発されて*Barnaby Rudge*を書いたし1846年には死刑完全廃止を求める記事も書いている。しかし、1850年頃には彼の死刑に対する態度は曖昧なものに変わったという。ともあれ、1861年には殺人罪、大逆罪以外の犯罪での死刑は廃止された。

第1巻9章では、Faginがthe DodgerとCharley Batesに、その朝の死刑執行の時に大勢の見物人がいたかどうか聞く場面が登場する。当時の死刑は公開処刑であり、月曜朝8時に執行された。Dickensが見た処刑は1840年7月6日に行われたもので、3万人の見物人がいた<sup>31)</sup>という。公開処刑は1868年に廃止された。

## 4 *Oliver Twist*、作品の背景

### (1) Dickensの生い立ち

Charles Dickensは1812年2月に、John Dickensの第2子、長男としてポーツマスで生まれた。海軍経理局勤務の父親の転勤で、ロンドン、チャタム、ロチェスターなどで幼年時代を過ごした。母親から読み書きの基礎は教わっていた。彼が10歳の頃にはDickens一家の経済状況が悪くなっていた。そのような家庭事情ではあったが1823年には姉のFannyはthe Royal Academy of Musicの生徒になっている。ところがCharlesは翌年初めに、国会議事堂の北、テムズ川沿いにあった靴墨工場 (Warren's Blacking) に働きに出されてしまった。その直後の2月には、父親は借金の返済不能のために逮捕され、妻やCharles以外の子どもたちとともに、マーシャルシー監獄に収監されてしまった。一家は5月には釈放されたが

Charlesは1825年の春までの約1年間工場で働かされた。このときに味わった屈辱は彼の人格形成に大きな影響を与え、受けた心の傷は終生癒えることはなかった。彼はこの体験を、ずっと後年まで妻や一番の親友のJohn Forster以外には、秘密にしておいた。Schlicke<sup>32)</sup>によると、Charles少年は靴墨工場で働いている姿を、集まってきた群集にじろじろ見られ、言いしれぬ悲しさと屈辱を味わったという。また、この時の仕事仲間にはBob Faginという名前の少年がいたという。Oliver Twistのユダヤ人の名前は、この少年から取ったものであった。小池<sup>33)</sup>はDickensの靴墨工場での体験について、次のように述べている。

その短い間の経験が、彼の後の作品のテーマを決定してしまった、と言ってもよいだろう。大都会ロンドンの華やかな面の裏にひそむ悲惨な生活、社会の矛盾や不正のしわ寄せをいつも背負い込まされる貧しい者、弱い者、幼い者たちの姿-----（中略）現実の19世紀の都会の生活は、あまりに厳しく、みじめだった。

多感な少年期の忌まわしい体験が、彼の心を傷つけトラウマとなって後年まで残ることになる。このトラウマは、前述のように秘匿すべきものであり、自分自身と重なるOliver少年には投影させなかったのであろう。幼年期にいじめや虐待にあいながら、純真な気持ちのままにいられるはずがない。Charles少年が、かなり高い確率で落ちていったかもしれない世界がOliver Twistに描き出された裏社会だったのである。白チョッキの紳士のOliverに対する予言"That boy will be hung."はDickens自身の運命であったかもしれないのである。この体験が、貧しい者、幼児、裏社会の女性などの弱者に対する共感、同情、あるいはこれらの原因となる社会悪に対する憤りなどにつながり、正義感の強い青年が作られたものと思われる。

## (2) 新救貧法

Newsome<sup>34)</sup>によると、18世紀後半に救貧法の改正が行われ、健康で丈夫な者には救貧院以外で働くことを認め、かつ、賃金で最低生活を維持できない労働者は、家族の大小などに応じて不足分のお金を援助してもらえることになった。救貧院に収容して行う院内救済に対し、これは院外救済 (outdoor relief) と言われた。しかし、当然ながら経費がかさむことになり、また、雇用主が意図的に低賃金で労働者を雇い、教区の援助を当てにすることを助長してしまった。Chadwickは、この賃金補助制度は、労使双方にとって、救貧制度の悪循環を絶つことに役立たないと考え、法改正に乗り出した。村岡<sup>35)</sup>は、Chadwickの報告書について次のようにまとめている。

(1) 労働能力者に対する院外救済は全廃されるべきこと、(2) 救済は救貧院によっておこなわれるべきことを提案し、これらの提案をより実効あらしめるために、(3) 「救貧院で救済される労働能力者の状態は、救済を受けていない最下級の独立労働者の状態を上まわってはならない」という、いわゆる「劣等処遇の原則」を打ち出した。

Emsley<sup>36)</sup>によると、新救貧法の推進者Chadwickは、労働者階級の人間で、まじめに働くことを嫌い怠惰

を好む連中が犯罪者になっていると考えていた。従って、怠惰を好み、その結果貧民になるのは本人の自己責任であり、社会全体で面倒を見る必要はなく、労働能力のある人間に対する院外救済などは、もってのほかということになる。これは、当時の支配階層に共通した考え方であったと思われる。1834年に成立した新救貧法（The Poor Law Amendment Act）は、個人の自助努力を求めることにより、安い労働力確保をねらったもので、救済を受ける対象者にとっては非常に厳しいものであった。その結果、救貧院は監獄に次ぐ嫌なところとなった。従来は家族での入所が可能であったが、夫と妻、おとなと子どもは分離収容された<sup>37)</sup>。夫と妻を分けたのは、保護対象の貧民を増やさないためであったが、高齢の夫婦にも同様に適用された。食事での会話は禁止され、その食事も、かろうじて足りるはずが、実際は健康を維持するには、ほど遠い分量であったという。多くの救貧院で監獄よりもひどい状態になっていた。

第2章の救貧院の場面では、管理人の年輩の女性が、食糧費のかなりの額を自分用にとってしまう記述がある。Oliverたちが、飢えに苦しむようになって3ヶ月もたった頃、1人の少年が、1日にもう1杯余分にお粥をもらえないと、隣りに寝ている少年を食べてしまうかもしれない、と口にした。ここから、Oliverの"Please, sir, I want some more."につながっていく。自助努力のできない老人や子どもは、救貧院で徐々に餓死するか、救貧院を出てすぐに餓死するかの選択（the alternative of being starved by a gradual process in the house, or by a quick one out of it(13)）をしなければならなかったのである。

新救貧法の推進者Chadwickは功利主義哲学のJeremy Benthamの門弟であった。1834年のこの時点ではBenthamは既に故人となっていたが、功利主義に基づいて改革がおこなわれた。最大多数の最大幸福で有名な功利主義はVictoria朝期に大きな影響力を持った考え方であった。川北<sup>38)</sup>は、Benthamの考え方を次のように述べている。

社会を、快楽を追求する個人の集合体としてとらえ、そうした快楽が全体として最大になることをめざすもので、全体（社会）のために個人の行動を規制する必要を認めなかった。つまり、個人の完全な自由を認め、国家による干渉を排除するものであった。

この精神に基づいて新救貧法などの諸改革がおこなわれたが、職場における非人間的な慣行の正当化などに利用される結果となった。前述のように、Morning Chronicle誌の記者であった22歳のDickensは新救貧法の基本的な考え方に対し猛烈に反対したが、公衆衛生の改革など賛意を示しているものもあった。根本理念は立派なものであっても、それを実行に移す段階で、一部の人たちに都合がいいように歪曲されることはよくあることである。

### （3）都市化の問題

産業革命を経て、イギリスが農業国から工業国へと転換をとげ、急激な工業化と都市化が進展したのがOliver Twistのこの時期である。村岡<sup>39)</sup>は、19世紀前半を「この30～50年の時期は、産業革命以来の工業化によって資本主義の生産関係が社会全体に拡大され、その矛盾がいろいろなかたちで爆発した時代であった」と述べている。こうした噴出する社会矛盾のひとつが、急激な都市化の問題であろう。

Dickensが生まれた1812年のロンドンの人口はおよそ100万人であったが、彼が死んだ1870年には320万人になっている<sup>40)</sup>。58年間に約3.2倍に増えており、猛烈な勢いで都市化が進んだことを示している。19世紀前半の50年間で見ると、1801年のイングランドの人口が866万人、1851年には1674万人に達し、約2倍になっている。その間、ロンドンの人口は96万人から236万人と、約2.5倍に増えている。川北<sup>41)</sup>によると「1700年ころには、人口の4人のうち3人までが農村に住んでいたのに、1851年には両者がほぼ等しくなった」としている。都市の人口急増は一部の地域のスラム化を引き起こすことになる。スラム街では、犯罪発生率の増加や衛生状態の悪化などが問題となる。ロンドン塔東側のイースト・エンド地区は、まさにそのスラム街であり、「ここは犯罪人、外国人、娼婦、貧民がひしめきあう窃盗、強盗、殺人のメッカ<sup>42)</sup>」となっていたのである。*Oliver Twist*の主な舞台はこのスラム街である。

*Oliver Twist*の中で、追いつめられたSikesが逃げ戻ってきて、誤ってロープに宙吊りになって死んだ所がジェイコブ島の中となっている。彼は、この場所をthe filthiest, the strangest, the most extraordinary of the many localities that are hidden in London(416) (この大都会の裏側の地域の中でも、もっとも不潔で、見なれぬ異様な一隅(下298))と説明している。Dickensは1850年の「安価版」への序文で、このジェイコブ島に触れている。序文の冒頭で、こうしたスラム街がきちんとした健全な住環境にならない限り、イングランドの貧民の生活向上はあり得ないとし、その確信は本が発行された11、2年前も今も変わらない<sup>43)</sup>と述べている。劣悪な住環境の改善は、あらゆる社会改革に優先すべきものであり、それができなければ急速に増加する、この階層の人々が自暴自棄で悲惨な状況になり、結果的に社会全体に破滅的な影響を与えるということである。Chadwickらの考え方とは異なり、都市のスラムの劣悪な環境が結果的に犯罪や退廃に繋がるという気持ちが強かったと思われる。

Victoria期のスラムにおいて、周期的に伝染病(コレラ)が流行していた。Pope<sup>44)</sup>によれば、1830年代、都市問題に関心を持つDickensを含む進歩的知識人たちは、都市の犯罪や道徳的退廃を無知と貧困に結びつけて考えてはいたが、スラムの不衛生や病気はむしろ避けられないものと考えていたという。衛生改革に関連してDickensの名前が公に登場するのは1848年になってからという。確かに*Oliver Twist*にはコレラなど病気のことは触れられていない。この連載中は、まだ衛生状態の改善を強く意識はしていなかったと思われる。

## 5 おわりに

*Oliver Twist*および、この作品に描かれた19世紀初頭ロンドンの裏社会の状況を概観してきた。主人公Oliver少年の生気のなさ、当然あるはずのトラウマの欠如、物語の展開に偶然性が多いことなど、小説としての構成上の問題点はいろいろと指摘されてきた。しかし、裏社会に身を置くNancy、Sikes、Faginなどの人間の内面描写は、時を経ても読者の心を惹きつけるものがある。前述のように、この作品は小説としてだけでなく、社会問題を鋭く抉るドキュメンタリーとして読まれていたようである。

産業革命後の都市への急激な人口流入は、イーストエンドなど一部地域のスラム化をもたらした。劣悪な住環境の中で暮らす人たちの多くが、衛生状態の悪化により病気になったり、仕事がなく収入の手だてがないために窃盗などの犯罪に走るかしたであろう。当時の英国の社会矛盾の噴き出し口がこうしたスラム街であった。Wilson<sup>45)</sup>は、1837年から44年は、職のない100万人以上の貧民が飢え死にするよう

な、英国未曾有の経済不況の時期であり、*Oliver Twist* (1837年連載開始) は一般大衆に驚愕、怒り、反発を惹起したと述べている。また、Melbourne政権下に行われた救貧法改正 (*The Poor Law Amendments*) は、教育のある中流階級の人々に特に不人気であったという。

救貧院の惨状、窃盗、殺人等の犯罪、絞首刑など、大きな社会問題を扱ったこの作品は、19世紀初頭英国の都市問題の告発書と言えよう。

<注>

Dickensからの引用はPenguin Classics 2002 "*Oliver Twist*"版に拠る。その日本語訳は筑摩書房、ちくま文庫、小池滋訳「オリヴァー・トウイスト」上・下版に拠る。いずれも、( )内の数字はページ数を示す。

- 1) "*Appendix A THE AUTHOR'S INTRODUCTION TO THE THIRD EDITION(1841)*" in *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne. Penguin Classics, 2002. p.457.

I wished to show, in little Oliver, the principle of Good surviving through every adverse circumstance, and triumphing at last.

- 2) 江藤秀一・松本三枝子 (編) 「イギリス文化・文学への誘い」 開拓社 2000. p.202.  
3) Patten, Robert. "*Newgate novels*", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.405.

ニューゲートは城壁の街ロンドンの五番目の門で門の上が牢として用いられた。1783年にタイバーンでの処刑が廃止され、その年から1868年まではニューゲートで公開処刑が行われた。処刑は月曜日の朝8時に執行、重罪犯であるほど見物人は多く、ひどいときは4, 5万人が路上にひしめいた。(西條隆雄「ディケンズのロンドン」松村昌家編『ディケンズ小事典』研究社出版1974. p.38.)

- 4) Patten, Robert. "*Ainsworth, William Harrison*", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. pp.6-7.

- 5) Patten, Robert. "*Newgate novels*", *op.cit.*, p.405.

- 6) 野町二・荒井良雄「イギリス文学案内」朝日出版社 1986. p.194.

- 7) 山本史郎「名作ダイジェスト」松村昌家編『ディケンズ小事典』研究社出版1974. p.68.

- 8) 小池滋「解説」小池滋訳『オリヴァー・トウイスト』上・下版 筑摩書房 下p.375.

- 9) Eigner, Edwin. "*melodrama in Dickens's writing*", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.380.

- 10) 17章の冒頭部分.

It is the custom on the stage in all good, murderous melodramas, to present the tragic and the comic scenes in as regular alternation as the layers of red and white in a side of streaky, well-cured bacon. . . . As sudden shiftings of the scene, and rapid changes of time and place, are not only sanctioned in books by long usage, but are by many considered as the great art of authorship.(134-135)

舞台上で演じられる血なまぐさいメロドラマの傑作では、悲劇的な場面と喜劇的な場面とを、ちょう

どよく保存されたペーコンの切り口の赤と白の縞模様のように、かわるがわる順序正しく見せるのが通例である。・・・突然の場面の転換や、時と場所の急速な変化は、小説においても昔からの慣例として認められているばかりか、立派な創作上のテクニクである、と多くの人たちから考えられている。(上222-223)

- 11) Horne, Philip. "Introduction", in *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne. Penguin Classics, 2002. pp.xxxvii-xxxviii.
- 12) Patten, Robert. "serial literature", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.527.
- 13) Schlicke, Paul. "Oliver Twist", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.441.
- 14) *Ibid.*, p.441.
- 15) 西條隆雄「*Oliver Twist*における暗黒世界の实景」甲南大学紀要文学編92. 1995.
- 16) Emsley, Clive. "crime, crime prevention, and criminals", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.129.
- 17) Horne, Philip. "Notes", in *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne. Penguin Classics, 2002. p.499.
- 18) Smith, Grahame. "utilitarianism", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.593.
- 19) Emsley, Clive., *op.cit.*, p.132.
- 20) "THE AUTHOR'S INTRODUCTION TO THE THIRD EDITION(1841)" *op.cit.*, p.456.
- 21) Horne, Philip. "Introduction" *op.cit.*, p.xxxiii.  
 Nancy's activity as a prostitute (her beat, clients, economic arrangements) is also completely left out, or at any rate left to our imagination.
- 22) p.133.  
 I thieved for you when I was a child not half as old as this (pointing to Oliver). I have been in the same trade, and in the same service, for twelve years since;
- 23) Ella Westlandによれば、当時の典型的な売春婦は、主に経済的理由で10代後半でこの道に入り、たいていの場合、数年後に元の社会に戻り、結婚して自分の家庭を持ったという。Westland, Ella. "prostitutes and fallen women" in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.476.
- 24) Westland, Ella. "women and women's issues", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.602.
- 25) Horne, Philip. "Introduction" *op.cit.*, p.xv.
- 26) 西條隆雄「*Oliver Twist*における暗黒世界の实景」 *op.cit.*
- 27) Horne, Philip. "Introduction" *op.cit.*, p.xv.
- 28) Clive Emsleyは、1820年代の10年間のイングランド、ウェールズにおける死刑の執行は、年平均60～70件であり、殺人罪での死刑はおよそ4分の1であった、としている。Emsley, Clive. "capital punishment", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000.

p.66.

- 29) "Appendix A THE AUTHOR'S INTRODUCTION TO THE THIRD EDITION(1841)" *op.cit.*, p.457.  
MacheathはThe Beggars' Operaに登場する泥棒の親分で、死刑判決が破棄されて釈放される。
- 30) Emsley, Clive. "capital punishment", *op.cit.*, p.67.
- 31) Horne, Philip. "Introduction" *op.cit.*, p.xxxii.
- 32) Schlicke, Paul. "Warren's Blacking", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.596.
- 33) 小池滋, *op.cit.*, p.368.
- 34) Newsom, Robert. "poor relief and the New Poor Law of 1834", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. pp.464-465.
- 35) 村岡健次「第3章改革の時代」村岡健次・木畑洋一編『イギリス史3近現代』山川出版社 1999. p.83.
- 36) Emsley, Clive. "crime, crime prevention, and criminals", *op.cit.*, p.130.
- 37) Wilsonは、分離収容された、ある母と娘について、次のように記述している。  
On Christmas Day, 1840, in the Eton workhouse, Elizabeth Wyse, a married woman, was allowed the rare privilege of being allowed to comfort her two-and-a-half-year-old daughter  
because she had chilblains. —中略— When the ex-sergeant-major, Joseph Howe, found Mrs Wyse in the nursery next day, bathing and bandaging her child's feet, he ordered her to leave the room at once. She refused. He dragged her downstairs, locked her in the workhouse cage, and left her in solitary confinement with no coat, no bedding-straw and no chamber-pot, in 20° F of frost, for twenty-four hours. The following morning she was taken to eat breakfast, which was the remains of cold gruel left by her fellow inmates, and sent back to the cage and told to clean the floor — which was inevitably soiled — but with no utensils to do so.  
Wilson, A.N. *The Victorians* W.W. Norton & Company, London, 2003. p.29.
- 38) 川北稔「第2章二重革命の時代」村岡健次・木畑洋一編『イギリス史3近現代』山川出版社 1999. p.61.
- 39) 村岡健次, *op.cit.*, p.72.
- 40) Schwarzbach, F.S. "urbanization" in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.591.
- 41) 川北稔「第6章ヘゲモニー国家への上昇」川北稔編『イギリス史』山川出版社 2001. p.253.
- 42) 西條隆雄「ディケンズのロンドン」, *op.cit.*, p.25.
- 43) "Appendix B PREFACE TO THE 'CHEAP EDITION'(1850)" in *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne. Penguin Classics, 2002. p.461.
- 44) Pope, Norris. "public health, sanitation, and housing", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford University Press, 2000. p.479.
- 45) Wilson, A.N. T, *op.cit.*, pp.28-29.